〇飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会 幹事 井上 郁美 氏

（平成 11 年、娘２人（当時３歳と１歳）を交通事故で失う）

［要旨］

事故の概要

平成 11 年 11 月 28 日、家族旅行の帰り、東名高速道路で 11t の大型トラックに後ろから追突され、長女・奏子（当時３歳）と次女・周子（同１歳）を目の前で亡くしました。事故は、職業ドライバーでありながら常習の飲酒運転によるものでした。

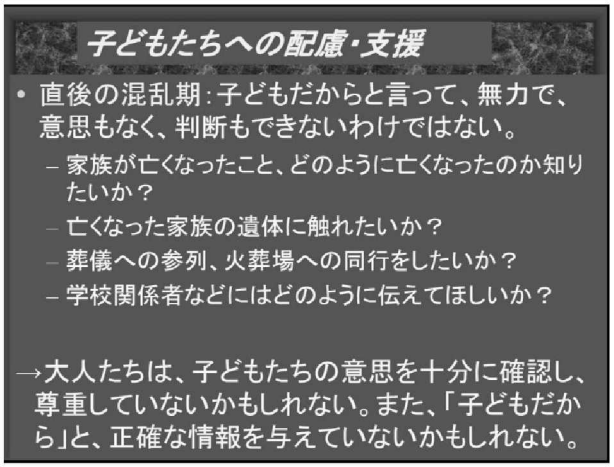
事故当時、私は妊娠８か月だったのですが、何とか自力で運転席から脱出しました。しかし、子どもたちの寝ていた後部座席は猛火に包まれ、近寄ることもできないまま、娘２人が焼死しました。助手席にいた夫は、奇跡的に助け出されましたが、全身に大やけどを負い、手術を繰り返しましたがその傷は一生治ることはありません。

子どもたちへの配慮・支援として望まれること

事故の６週間後に、三女が生まれ、その後、長男、次男、四女が生まれました。事故後に生まれてきた子どもたちの育て方について、悩んだり苦労したりすることがありましたが、当時の社会状況では、指南となるような情報を集めようと手を尽くしても、集めることはできませんでした。

同じように家族を亡くした子どもたちの多くに聞かされたことは、「子どもだからといってなめないでほしい、子どもだからといって『〇〇ちゃんは、お星さまになったんだよ』という言葉でごまかさないでほしい。」ということです。きちんとした説明が欲しかったのに、誰もきちんと説明してくれなかったという思いは、何年経っても引きずります。事故直後の混乱期、子どもだからと言って、無力で、意思もなく、判断もできないわけではないのです。

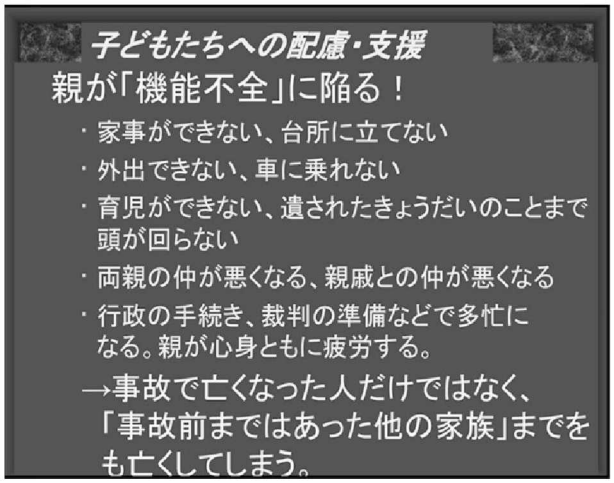
これは、子どもだけでなく大人でも同じです。私自身、妊婦だから、被害者だから、かばわなくてはならない存在だから、と周りの人が私本人の意思を確認せずに判断してしまうことがあり、そのことは、何年経っても心の中に引きずっています。例えば、遺族が亡くなった家族の体に触れたいと思っていたとしても、周りの人から「見てはいけない」と決めつけられてしまうのです。本人は見たいかもしれない、触りたいかもしれないのにもかかわらずです。また、どのような状況で亡くなったのかを伝えるかどうか、葬儀への参列や火葬場へ同行するかどうかは、大人であれ子どもであれ、本人の意思次第です。にもかかわらず、周りの大人が、子どもには見せてはいけないと決めつけていることが、かえって、何年経って



も取り返しのつかない記憶(心の傷)として残ることになってしまうのです。人はそれぞれ個人の意思があるものという考え方に立って、接しなくてはなりません。

特に学校関係者には、子どもに対して伝える内容、情報量、伝え方にも配慮してほしいと思います。大人だから、子どもだから、小学生だからどのくらい、と一方的に決めつけるのではなく、大人と同じぐらいの情報を与えても大丈夫かもしれないということも考慮しつつ、子どもたちの意思を十分に確認し、尊重し、適切な方法で正確な情報を与えてほしいと思います。

周囲の人は、子どもを亡くしたお父さん、お母さんの悲しみが一番深いだろうと親を気遣ってくれます。それは大変ありがたいことではありますが、一方で、「お父さん、お母さんを支えてあげてね。」と言われた子どもたちは、「どうしたらいいんだろう」と悩んでしまいます。子どもは親を支えるべきという固定観念があると思うのですが、子どもだって大事な家族を亡くしているという意味では同じです。「自分たちの悲しみは、誰が気にかけてくれるのだろう」と独りで思い悩み、追い込まれてしまうのです。



親は、大切な子どもを亡くしたとき、全く気力がわかなくなり、「機能不全」に陥ります。手を洗う等の簡単な日常の習慣もできなくなります。ご飯をつくるため台所に立つこともできなくなります。亡くなった子どもが好きだった食材を扱うことも、スーパーで見ることさえつらくてできません。事故の前日までは普通にしていた、遺されたきょうだいの学校や習い事への送り迎えもできなくなります。育児や遺されたきょうだいのことまで頭が回らなくなるのです。そのようなときは、少しだけでも家から出て友達と会うことを促してくれる等、なにか、些細な気遣いのある支援があればよいと思います。また、そのような心身の状態でも、事故に関する行政の手続きや裁判のため、関係機関の窓口に出向かなくてはならなくなります。慣れない書類をつくらなくてはなりません。日常的にこれまで全くやる必要のなかった作業に忙殺され、親は心身ともに疲労してしまいます。両親の仲が悪くなり離婚してしまう、親戚との仲が悪くなる、という家庭もたくさんあります。事故により、「事故前まではあった家族」までをも、亡くしてしまうのです。

きょうだいを亡くした子どもたちに必要なことは、やはり、同じような境遇、同じような体験を持つ子どもと時間を共有することだと思います。例え年に 1 回でも、同じ境遇の子どもたち同士で仲良く交流することで癒されるのです。同じような境遇の仲間の必要性は、大人も同じです。ここで大事なのは、遺族ということだけではなく、子どもと大人が別々に、「子ども同士」「大人同士」でリラックスして交流できる場があるということです。

大人が気をつけなくてはならないこと

私自身親としての失敗もありました。子どもたちに対しては、事故に関する情報が不用意に耳に入らないように気をつけていたのですが、あるとき、テレビの報道で流された当時の事故映像を子どもだけで目にしてしまいました。何の気持ちの準備もない状態で、事故現場の生々しい映像を目にして、はげしく泣かれてしまいました。

また、事故で姉たちを亡くしたということを、子どもは望んでいないのに、親や周囲の大人が明かしてしまい、友達に知られたことで傷ついてしまったこともありました。周囲に知ってもらいたいこともあるけれど、本当は心の底では知ってもらいたくないと思っているのかもしれない、ということを親や周りの大人が十分に配慮しなくてはなりません。

子どもたちには、第三者の信頼できる大人の存在が必要です。そして、その第三者の大人は、子どもから聞いた話の秘密を絶対に守らなくてはなりません。子どもがせっかく信頼している大人に対して、親や他の人に言えないような言葉をあえて口走ったときに、それを親に伝えてしまったら、その子は誰を信用したらいいのか分からなくなってしまうからです。

子どもたちとともに亡き家族をしのぶ

我が家では、毎年命日前後に、「しのぶ会」を開いています。子どもたちには、年に１回そのときだけ、普段は口にしないお姉ちゃんについての話をします。そこでは、亡くなった子どもたちの普通の姿、得意だったことも苦手だったこともありのままの姿を話します。亡くなった子どもたちを神格化しないことがとても重要なのです。親や周りの大人が、亡くなった子どもたちのよい部分ばかりを言うと、遺されたきょうだいが大きくなり思春期を迎えたとき、「いくつになっても姉には敵わない」という引け目を感じるようになってしまうからです。

親も子どもも、何年経っても事故の影響はなくなりません。十何年経っても、突然涙が出てくることがあります。子どもが大人になって親元から離れて暮らすようになっても、きょうだいのことを思い出して急に涙が出てくることもあります。加害者は忘れようという努力をするかもしれませんが、被害者は忘れようという努力もしないし、反対に、忘れてはいけないと考えます。「〇年経ったからもう元気になったね」「 結婚して家族ができたら元気になるよ」「大人になったから」「社会人になったから」というような声かけは、被害者を傷つけるだけです。親子ともに、何年経っても事故の影響が突然出現します。何年経ても大丈夫とはならないのです。

でも、何年経っても亡くなった家族のことを語ってもよいのだということを周囲が理解し、語ることができる場をつくることが必要なのです。

最後に ～今、子どもたちに必要と感じているもの

これから先も、心身ともに健康で生き続けてもらいたい子どもたちへの継続的な支援を願って、

今、子どもたちに必要と思うことを４つまとめます。

・親などに対する怒りや自分自身の悲しみを聴いてくれる、利害関係のない人が必要。

・秘密を守り、子どもたちの信用を裏切らないために聴いた内容を決して親・身内には伝えないこと。

・経済面だけでなく精神面においても、遺児だけでなく、「きょうだい」たちを支える受け皿を設置してほしい。

・失敗を繰り返さないため、親も子どもも知識と経験、情報の共有が必要。